

COLUMN | 業務効率化 | 株式会社DnD

顧問弁護士に頼む前に、 AIで一次チェックを 契約書レビューの省力化と注意点

取引が増えるたびに契約書の確認を弁護士に依頼するコストが積み上がる。生成AIを「一次チェック」に使い、見落としリスクを減らしながら専門家への相談コストを絞り込む考え方と実践ステップを解説します。

2026年7月26日発行

株式会社DnD（Distill n Develop） | <https://dnd-inc.jp/>

この資料の要点

- ・生成AIは契約書の一次チェック（不利な条項・欠落・表現の曖昧さ）に活用できる段階まで来ている。
- ・AIは「問題箇所の洗い出し」には強いが、業界慣行や交渉文脈の読み取りは苦手——専門家相談を絞り込むツールとして使う。
- ・機密情報の扱いには注意が必要。無料プランへの貼り付けは避け、企業向けプランか固有情報の伏字化が基本。

なぜ中小企業の契約書確認は後回しにされやすいのか

契約書のレビューを外部の弁護士に依頼すると、1件あたり数万円～十数万円かかることは珍しくありません。頻繁に取引が発生する企業にとって、その費用は無視できない規模になります。顧問弁護士を月額で契約していても、すべての書類を都度相談するのは気が引ける——という声もよく聞きます。

結果として、担当者が「なんとなく問題なさそう」と判断してサインするか、確認作業を後回しにして手続きが滞るかのどちらかになりやすい状況が生まれています。

生成AIが「一次チェック」に使えるようになってきた

2026年現在、大規模言語モデルは契約書の日本語テキストを読み込み、問題になりえる箇所を指摘する精度が大きく向上しています。これらを活用することで、弁護士に確認するかどうかの判断材料を素早く得ることができます。

AIの役割は「全部読んで判断する」ではなく、「見落としやすいポイントに目印をつける」こと。

AIに何を確認させられるか

- ・一方に不利な条項：賠償責任の上限が相手方にしか設定されていない、解除条件が非対称になっている、など。
- ・一般的な条項の欠落：秘密保持義務・知的財産権の帰属・紛争解決の管轄などが記載されていない、または曖昧。
- ・表現の曖昧さ：「速やかに」「適切な範囲で」など解釈の余地が大きい表現の多用。
- ・自動更新・解約条件：気づきにくい自動更新の条項や、解約通知の期限が短すぎる設定。

一次チェックの3ステップ

- ・① **情報の保護を確認**：企業向けプランを使用するか、固有情報（社名・金額・個人名）を伏字にする。無料プランへそのまま貼り付けない。
- ・② **観点を明示して指示する**：「甲（自社）にとって不利になりうる条項を列挙してください」など目的を明確に問いかける。
- ・③ **AIの回答をもとに専門家への相談を絞り込む**：「この3点だけ確認してほしい」という形で依頼し、費用と時間を抑える。

専門家との使い分けが大切な理由

AIは確認のスピードと網羅性を補う道具であり、法的な最終判断を代替するものではありません。「AIがOKと言ったので問題ない」と結論を出してしまうのは危険です。AIが何も指摘しなかったとしても、「AIが気づかなかった可能性がある」と考える習慣を持つことが重要です。

業務の無駄を削ぎたいと考えている方へ

株式会社DnDでは、契約書管理を含む社内業務フローの自動化・効率化をご支援しています。「何から手をつければよいかわからない」という段階からご相談いただけます。ご相談・お見積りは無料です。

<https://dnd-inc.jp/contact.html>